

総合講演：20XX年度日本数学会賞春季賞受賞講演

「講演タイトル」 1
氏名(所属, 学位)

K 安定性の話題についてはいわば微分幾何の方々から代数幾何の方面へ送られた問題の「福袋」のようにも思われます。何が入っている？初めは中身は見え、個人的にも何かあると予想した後の試行錯誤でやはり無知の勘違いかもしれないと焦った日々も思い出します。が徐々に明かされていく内容には確かな中身が感じられラッキーでした。分野の人口が増え、私も現在の研究は焦点をずらしたところにはおりませんが、見せてくれる豊穡さの事実はさらに十年二十年と変わっていかないのでしょうか。

大変身に余る光栄な賞に、また家族、仲間感謝しながら初心を忘れず、じっくり腰を据えて日々「広義の仲間」と研鑽に励み、学問その物の豊穡さに向かっていきたいです。そう時間を確保する努力も一つの使命と感じます。

総合講演

「講演タイトル」 11
氏名(所属, 学位)

K3 曲面ほど有名ではありませんが、その仲間である Enriques 曲面も非常に面白い研究対象です。少しとっつきにくい点があるためか、私も本格的に研究したのは今世紀に入った頃です。グラハム・ベルの言葉「時には踏みならされた道から離れ、森の中に入ってみなさい。」(ベル研究所)を知ったのも同じ頃で、背中を押してもらった感じを今も思い出します。

企画特別講演

「講演タイトル」 23
氏名(所属, 学位)

最近、条件を満たすものを漏れなく重複なくすべて生成する列挙アルゴリズムと、個数の数え上げにはまっています。多面体の展開図もそうですが、対称性をもとに同型性が定義されると、問題が途端に面倒になってきます。そうは言いつつ、きれいな対称性を愛でつつ、同型性を除去したものの列挙にいそむ今日この頃です。他にも楽しい列挙問題がありましたら、ぜひ教えてください。

「講演タイトル」 29
氏名(所属, 学位)

集合論のいわゆる連続体の謎に魅せられて数学の道に入ったわたくしは、名古屋でいまは亡き柘植利之先生と篠田寿一先生の教えを受けて計算論に開眼しました。それ以来、個々の実数の計算論的な複雑さをどこまでも追っていくことが連続体の謎を解くことにつながるという確信、というより、つながってほしいという願望とともに歩んでいます。その思いから今回の講演タイトルを選ばせていただいたのですが、準備している間になんだか全然別の話にシフトしてしまった気がしています。

見本

「講演タイトル」 41

氏名(所属, 学位)

20代の頃, 結晶学で数論の応用ができるのではと思って以来, 現在の研究を続けています. 当時, Conwayの“The Sensual (Quadratic) Form”の翻訳を本屋で見つけ, ちょうど始めかけていた粉末回折パターンの格子決定の手法開発に, 関係する様々な話題をこの本の中に見つけ, 実験のことはよくご存じの物理の先生方に, それは奇遇だと面白がっていただきました. 以来, 現在まで, 私はよく格子や2次形式の“香り”がする学際研究のテーマを見つけてくるのですが, その仕組みは自分でもよく分かっていません. ただ学際研究をする際は, 実際のデータをもらうようにしています. 学生の頃の第一印象は, 格子は四角四面なもの, でした. 今の状況を当時の私が知れば驚くでしょう.

「講演タイトル」 53

氏名(所属, 学位)

Lie群や等質空間のループ空間のコホモロジー環の研究(計算)から始まり, 自由ループ空間の研究に進んだのは, 大学院博士課程の頃1980年代後半で, まだストリングトポロジーは世に出ていませんでした. その後, 写像空間の有理・ p -adicホモトピー論, 特異チェーン代数上の三角圏構造, トポスの代数的組合せ論への応用, そしてChas-Sullivanからは10年以上経っていましたが, ストリングトポロジーの枠組みで再び自由ループ空間の研究を進めています. そこにはいつでもスペクトル系列の考察と計算がありました. 近年は, 多様体の一般化であるディフェオロジーにかなり傾倒しています. やはり計算可能なスペクトル系列を構成して, 不変量の計算に役立たいと考えています.

「講演タイトル」 65

氏名(所属, 学位)

可積分系の代数解析の観点から, 表現論と特殊函数に関わる数学に携わってきました. 超幾何函数について最初に学んだのは学部4年生の時だったので, 優に40年が経過してしまいました. その時々「これは大事」「これは面白い」と思うことをやってきた積りなのですが, 結局, 超幾何函数から離れられません.

「講演タイトル」 89

氏名(所属, 学位)

学部4年生のゼミで加藤敏夫先生の名著「Perturbation theory for linear operators」に出会い学んだことにより解析学に興味を持つようになりました. 数理物理学に現れる偏微分方程式を発展方程式理論を用いてエレガントに扱っていることに惹かれました. 大学院に入学するころにCrandall-Liggettにより非線形半群の生成定理が発表されたりして, 非線形問題の研究を多くの若い研究者が活発に行うようになりました. そして発展方程式研究会と発展方程式若手セミナーが設立されました. このような環境の中で発展方程式, 特に非線形と準線形方程式, さらに退化放物型方程式, 非線形保存型方程式の研究を行うことができたのは幸運であったと思います. これからも若い研究者が魅力ある環境を作っていくことができればよいと思います.